

テュールジヨンの價值學說史

“La valeur d'après les économistes anglais et français depuis Adam Smith et les Physiocrates jusqu'à nos jours” par Charles Turgeon et Charles-Henri Turgeon.

一

本書は一九一三年にCharles-Henri Turgeon一人によつて英國價值學說史として著されたものを一九二〇年に改定すると同時に其の父たる Rennes 大學法學部長兼教授 Charles Turgeon が Physiocrates 以後に於ける英國價值學說史を加へ共著として世に問ふたものである。而して Charles Turgeon が斯くの如き學說史の研究の後近き將來に於て氏自身の價值論——彼の經濟學を其の上に建つべき意味に於ける——を發表すべき事を序文に於て述べて居る。その意味に於て本書は氏の價值論研究第一卷として書かれたものである。

前半を以て英國價值學說を述べ後半に於て英國價值學說を説くに當つては Adam Smith 以後年代を追ふて代表的な經濟學者の學說を順々に叙述して居る。即ち「Adam Smith, Ricardo, Mal

thus, Senior et MacCulloch, John Stuart Mill, Stanley Jevons et Macleod, 及び Cairnes, Marshall 其他現代の經濟學者」の學說を章を追ふて述べ第八章に於て之等英國學說發展の (Résumé) をなして居る。第九章以下四章に亘つて佛國價值學說を述べ其の内前三章を以て學說敘述に充て最後の章に於て佛國學說の綜合を試みて居る。學說史たる性質上說そのものを敘述せるは勿論である。然し讀後餘感として言ひ得るは個々の價值學說を述ぶるに當りその個々の學者の抱ける經濟學說全體との關係を考ふること尠きこと、如何にして斯くの如き考を持つに至りしか即ち學說と其の學說を主張する人の心持とを結びつけて理解せんとの努力を看得ざると等の缺點である。従つて經濟學史を讀みて共通的に感ずる隔靴搔痒の感は上記二點によつて一層強められたと言ひ得る。

II

Physiocrates 以後に於ける佛國價值學說の發展は英國に於ける夫れと甚しき相異點を持つて居る。Adam Smith を出發點とせる英國經濟學が價值の本質を費用に求め勞働價值說を固執し Quesnay, Turgot 等より發せる佛國價值學說が價值の本體を效用——主觀的效用——に見出したる點に於て根本的相異あるは勿論であるが夫等學說の發展の跡も亦著しく異つて居る。即ち英國に於ける價值學說は Adam Smith より順を追ふて發展して J. S. Mill に至り S. Jevons の革命に逢ひて效用學說を容れ Marshall によつて統一調和せられた。勞働より生産費に、供給より需要に、獲得の困難より最終效用に其の觀點を移した。Adam Smith より Marshall に

至る一つの連續せる鎖とも看得る。然るに佛國に發展せる價值學説は終始主觀的效用に其の本質を求めた。其の發展の跡は鎖狀でなく漸々と肥太る球に比す事が出来る。

斯の如く價值の本質を明にせんとの問題に携りながら如何にして如上の相違を生じたか。主として佛國學説の主張する所は何故に財に對し價值を認むるかに答へ、英國學説は如何にして價值は創造され如何なる點に於て決定せらるゝかを問題として居る、兩者少しく其的を異にして居つた爲である。之に對する答として前者は人間に則したる主觀的效用價值を考へ、後者は物に則して客觀的費用價值を考へたるは誠に當然の事と云はざるを得ない。而して佛國學者が抽象論に進み英國學者が實際論を重視する、一は形而上學的要求に基き他は實用論的的に走る。所謂英國流佛國流の差異の存する所獨り價值學説研究上の興味のみに止らない。

茲には本書後半により佛國價值學説を紹介し且つ本書引用する所の文献を加へるに止める。

III

Physiocrates 以後に於ける佛國經濟學者は殆ど一樣に人と物との關係に於て發生する效用を價值の基礎とした。如何にして物に價值が發生するか、吾々生産する財の價值存在理由は、何所にありや。彼等は其の根據を慾望と物との關係に於て發生する效用に置いた。而して價值發生上第二次的原因をなす稀少性、勞働、交換等を主要原因たる效用と區別すべく *Utilité rare*, *Utilité onéreuse*, *Utilité échangeable*, *Utilité finale* 等の語を用ひ

た。

今稍詳細に紹介するに先立ちて佛國學說發展を概觀せんに其の發生は十八世紀後半なりと見得る。未だ明確を缺き動搖を免れ得ざりし價值學說はTurgot, Condillacによりて其の基礎を人間の心理的なる慾望に發見した。十九世紀の前半に入りしJ. B. Say, Ross 出で一八五〇年頃に至り英佛の價值學說は互に其の影響を及し滲透作用の行はるゝを見た。即ちそれまでの佛國學說は主として效用即ち消費者の立場に於て考へられ英國學說は費用即ち生産者の立場に於て立論せられたが此の頃に行はれた相互滲透の結果は佛國學說も生産費を考慮の中に加へ、英國學說も消費者の享受すべき、效用を取り入れた。佛國に於てはBaudrillard, H. Tassay, J. Garnier等、英國に於てはJ. S. Millに之を看取する事が出来る。然れども佛國學說に於てはあくまで效用を最重要位に置き慾望から離れず、即ちUtility rate は彼等の基本として握つて居つた所である。一八七〇年以後はオーストリア學派限界效用說の影響を受けた事は勿論である。然しながらUtility rate はそれ自らMengerの限界效用J. von Yonksの最終效用と一致點を持つものである。普佛戰爭以後に於ける佛國經濟學界は戰後の經濟問題と關連し實際上の必要に迫られ隆盛を呈した。其の間に生れ出でた二つの流れ即ち在來の古典主義自由主義を奉じ英國學說に對し自らを開くacademiqueの流れと自由批評の立場に立ち折衷主義をとり獨逸歷史學派に同情を持つuniversityのの流れとがある。其の經濟學の立論の態度と内容に相異のあるは勿論であるがその抱く價值學說が佛國傳統の心理說を守り終始一貫して其の中心點に主觀的な效用を含んで居つた。

以上の如き發展の跡をたどりたりと考へらるゝ佛國の價值學說史を叙述するに當り著者は三時代を劃し *Les initiateurs*, *Les constructeurs* 及び *Les continuateurs* とし、*Les initiateurs* とし、*Physiocrates* を中心とする價值學說を叙し、*Les constructeurs* として J. B. Say より Cournot に及び英國學說の影響時代を主として述べ、*Les continuateurs* として一八七〇年以降現代に至る價值學說を説明して居る。順を追ふて大體の紹介を試みる。

四

主觀的效用價值學說は *Physiocrates* 及び其の時代の經濟學者の多くが Adam Smith 以前に於て既に之を創始すると共に盡したかの觀がある。Quesnay は直接慾望充足にあてらるゝ物の價值を *Value usuelle* と稱し、交換の仲介によりて初めて使用し得る物の價值を *Value vénale* と稱した。使用價值と交換價值である。斯の如き Quesnay の思想は伊太利經濟學者 Galiani (1723—1787) に發するとせらるゝ。Galiani は人間活動の働因と物に對する評價の基礎を慾望に置いた。即ち人は此の慾望に従つて評價をなし價值の大さを定める。されば人間は價值の第一原因なりと主張し、價值とは人間思考の中に於ける一物の所有と他物の所有との比較的觀念であるとなした。Quesnay は上の如く二種の價值を區別し使用價值の源に心理的效用を認めては居たが深く遡る事をしなかつた。然るに彼の周圍をめぐる *Physiocrates* の殆ど凡ては主觀的效用價值を極めて詳かに論じて居

るのみならず之を以て經濟學の出發點として居る。

Adam Smith の *Wealth of Nations* に先立つこと十年、一七六七年 *Physiocrates* に賛成し得た *J. Louis Gratin* は *Essai analytique sur la richesse et sur l'impôt* を出版した。彼は富に關連して主觀價值説をとり、如何なる物の價值も其の物と對照して慾望の高低大小に依つて増減すると。また *Physiocrates* の別派をなす *Turgot* に至つてより明確となつた。彼は使用價值は交換價值に先つて存するものとし其の論文 *Valeurs et monnaies* に於て使用價值を *Valeur estimative* とし交換價值を *Valeur appréciative* として區別した。*Valeur estimative* と言ふ、人間が其の慾望充足資料たる物に對して附與する尊重 *estime* の度合を表すが故である。*Valeur appréciative* と言ふ、個人的尊重の度合を表した多くの *Valeur estimative* が出合つて決定せらるゝからである。前者は孤立の人に於ても存するが後者は交換の存在を其の發生要件とする。

價值と效用とを混合する事は英國學者に尠くない。然しながら *Turgot* は明瞭に之が區別をなした。物が自己の慾望充足に適せりと考ふる時其の物に效用を認めたのである。然し *Turgot* は之れを以て直ちに價值ありとはしない、其の效用ありと認めたる物と他の物とを比較する時に初めて價值ありとなす。使用價值は效用ある數種の物の間に於ける選擇を豫想し慾望の段階、效用の比較を要件とする。即ち野蠻人は空腹の場合には熊の皮よりも其の肉を慾すべく、食慾が充足され次に寒氣を覺ゆる時は熊の皮を慾するであらう。斯く使用價值は慾望の漸變によつて變り、效用の移るに従つて替る。斯くの如き個人的價值判斷に關し *Turgot* は先見と獲得の困

難を加へた。是によつて慾望の區分、選擇の順序、效用の評価をなしうる。何人も將來に對する蓄へは存在量豐富なるものよりも稀少なるものに就て先づなす。茲に於て獲得の困難又は稀少性は價值論の問題となる。以上の如く種々の條件を考へたる後彼は *Valeur estimative* をば人間がその慾望の異りたる對象に認むる尊重の度合なりとした。

一七五五年に出版せられた *Essai sur la nature de commerce* に於て *Cantillon* は *Valeur intrinsèque* なる觀念をとり貨物を生産するに要せる土地と勞働の量とし價值を物の中に求めたるを排し *Condillac* は之れを人間の内に見出した (*Le Commerce et le Gouvernement* 1776)。即ち曰く價值を絶對的性質として物に附着せしめて考ふるは全く誤つて居る。價值は人間の使用と關係して起る。人間が物に有用性を認めざる場合に價值なし。故に價值は物の有用性に對してなす判斷の結果であり、人間の斯くの如き判斷の大小によつて増減する。斯く *Cantillon* によりて方向付けられんとした佛國價值學説は *Grasslin*, *Turgot* を經つて *Condillac* によりて全く心理的價值學説に移つた。彼はまたその價值概念を決定するに不可分的要素として效用と共に稀少性を考へ且つ兩者は相互依存の關係に立ち稀少性の大となる事はそれ自ら效用を増す所以と考へた。

Le Trosne, *Morellet* 等 *Physiocrates* に屬する者は凡て心理的價值説をとれり。殊に *Le Trosne* は其の著 *De l'intérêt social*, 1777 に於て價值發生の四原因を擧げ、物の有用性、生産費、稀少性及競争となし極めて深き研究を遂げて居る。

五

以上述ぶるものは *Utilité*, *Valeur d'usage* 及び *Valeur d'échange* をば慾望を以て支へたる階段に於て考へた。即ち *Utilité* は内界の慾望と外界の對象との間に立てられたる關係であり *Valeur d'usage* は數箇の *Utilité* 間に於ける比較によりて選擇の順序を豫想する。而して *Valeur d'échange* は *Valeur d'usage* の社會的開展であり各人相互の使用價值判斷の出合である。斯く價值は慾望に基礎を置きたる概念にして人性の最深に其の根底を見出した理である。而して本書著者は上述 *Physiocrates* を中心とする價值學說を主として心理主義に甚くものとし次に *Les constructeurs* として英國學說攝取時代を考へた。

J. S. Say は深く英國功利思想に賛し其の經濟學說に於ても *Physiocrates* の流を受入るゝよりも英國經濟學に影響せらるゝ所多かつた。彼の經濟學は富なる概念の上に建築せられ其の富は交換價值と離すべからざる關係に立つ。而して其の價值は比較的のもので物の性質に基き獨立に存するものと考へず、人によりて初めて存在し慾望、效用、價值と順次に考へる。而して效用を意味するに Adam Smith の效用が衣食住に役立つ事に限定して解せらるゝに對し Say は其の範圍を限定せず、如何なる仕方によるを問はず人に役立つ物の能力と解した。次に物の交換價值を考へるにそれと交換取得する他物の量となし、斯くの如き交換價值の由つて來る所需者と供給者との間に行はるゝ評價の差に歸した。而して需要は效用によりて決定され供給は生産費によりて制限さる

るとなし英國學説を異つた方法に於て受入れて居る。且つ斯く生産費を價值論中に入るゝのみならず自然價值なる考へを取入れた。然し此の最後の考は左して發展せしむる事なくしてつた。(Cours complet d'économie politique pratique, 1840; Epitome des principes fondamentaux; Traité d'économie politique, 1803)。

Joseph Droz も同様に考へ價值の原因を *utilité* と *rareté* とに求め前者を第一次的のものとし後者を第二次的のものとし *rareté* をば其物を持來すに要する勞働と結附けて考へた (*Economie politique ou Principe de la science des richesses* 1846)。

Résumé に至りて使用價值を社會的意義に考へ有用なる物を人間の欲望充足に充つるに直接なる場合と間接なる場合を別ち前者を自ら物を所有する場合とし後者を交換取得によりて初めて欲望充足に充てらるゝ場合とした。而して後者の場合即ち物に對し欲望を感じ然も量に於て制限あり且つ自ら所有せざる場合に交換起る。されば後者の場合に起る交換價值は *utilité*, *rareté* 及び *transmissibilité* を豫想する。即ち交換價值は使用價值の一形態である。而して *Utilité* を人間欲望充足に役立つと言ふ如く廣く解したる事と *rareté* の増加は直接に *utilité* を増加するものなりと考へる事によりて金剛石の交換價值大なるは使用價值大なるによるとして Adam Smith の困難を救つた。而して斯くの如き交換價值は現實の交換によりて決定せられ其の場合に需要供給の競合に依るも彼は之を交換價值決定の單なるメカニズムと解し各の背後に欲望と努力とを結付けて考へた。(Cours d'économie politique, 1854)。

Bastiat は價值を著しく人間關係に持來し *le rapport de deux services échangés* 交換された二つの service の關係となした。之れ彼の經濟學の根本信條た

る社會連帶的調和觀より來りし均衡的解釋に淵源するものにして其の背後には佛國流の效用を認めた。彼は效用を分ちて *utilité gratuite* と *utilité onéreuse* となし前者は對自然關係にして後者は人と人との間に於ける協働によりて生じ、此の *utilité onéreuse* を獲得するに要する *service* を價值の基とせしものである。(Harmois *économiques*, 1864) Baudrillart に至つては英國流殊に J. S. Mill と著しく近く價值は需要供給により決定し且つ一般に生産費に落着くものとした、然し尙佛國學說を離れず人間の經驗する慾求は物の價值を決定する場合に生産費よりも強く働くと考へて居る(Manuel *d'économie politique*, 1854) Passy はより以上英國流に近く一方に於て消費の慾望を考へると同時に勞働、生産費等を内容とする *Onérosité* 有價性を原因として居る(Dictionnaire de l'économie politique, 2e édit, Guillaumin, 1854) Joseph Garnier も著しく英國學說に影響せられ價值を效用と費用の二元に求め費用を分解して勞銀と資本利子となし、之を以て價值起因の根源とした。(Traité d'économie politique, 8e édit, 1880)

六

一八七〇以降に於ける佛國經濟學は既に述べたる如く、académique と universitaire との二つの異なる流れに分れたれども其の抱ける價值學說に就ては共に佛國在來の心理主義に棹して居る。而して普通に價值と稱する時は使用價值を意味し Gide の所謂適慾性の度合 *degré de désirabilité* となし交換價值は他の物の一定量と交

換し得る能力となす。而して斯くの如き交換價值を發生せしむる源を獲得の慾求と獲得の困難とに來した。之れを要するに現代に於ける佛國價值學說を概觀するに價值發生の原因と條件とを大體次の如く擧ぐることを得る。

即ち (1) *besoin éprouvé* (2) *satisfaction recherchée* (3) *utilité* (4) *rareté* (5) *la notion juridique de la propriété* を擧げ、(1) 及 (2) によつて *utilité* を生じ之れと *rareté* とによつて價值を生ずる。而して之等諸條件は凡て私有財産なる法的觀念の上に立てらるゝ事を要する。

上に述ぶるが如き價值起因の諸條件は如何に人の心に働くか、如何に人の價值判斷を決定するか。此の問題に向つて佛國學者は限界效用説を輸入して居る。されば彼等が價值起因を論ずる意味に於ては依然として *Physiocrates* より相續したるものを以て足るとなし、受入れたる限界效用説は價值現象の説明たるよりも價值判斷のメカニズムの説明と解して居る。只限界效用説は普通に使用價值に關してのみ考へらるゝに對し *Camille Peccreau* (*Cours d'économie politique*) *Landry* (*Manuel d'économie*) は凡ての交換價值が使用價值の出入と均衡を豫想するものなるを理由として、交換價值をも限界效用説を以て説明し得ると考ふる點に於て特色を持つ。また需要供給の法則を價值論に關與せしむる場合には之れを以て *Fait générateur* とは考へず單に *Fait régulateur* と認むる事が一般なりと看得る。

著者は *Les initiateurs* としつ *Physiocrates* を中心とする學者を擧げ效用價值説の創始者とした。而して費用より説明する價值學説は *Les constructeurs* の時代に入り英國學説の影響により起れるものと説いた。言葉に

よる説明として費用を考慮に入るゝに、より明なる表示をなしたるは著者の説く如く英國學說の輸入ありて後なるべきも、余の僅少なる知識によるも尙 Physiocrats の思想中に明に之れを見る事が出来る。殊に Le Trosne が價值の第二原因として les frais indispensables qu'une chose a coûtés をあげ (De l'intérêt social, I.—Physiocrates, Guillaumin, 1844, Deuxième partie, p. 893) Turgot が前掲論文に於て效用を價值起因として考ふると同時に費用を價值の尺度として加へたるを見るも片言雙語に基く解釋と否認し去るを得ない。之れを要するに Physiocrats を中心とする價值學說は效用を主とし費用を賓とするものとして學說史上興味淺からざるを覺ゆる。

〔附記〕 本書により學說の内容を紹介するに當り不知不識の間に於て本著を離れ原本によりし點がある。紹介の任務を忘れたるを謝す。

—(大正十二、二、五)—

山口 茂